

「読解力を育む『20の観点』」で育成方針を示し、ワークシートやアセスメントで現場を支援

三重県 四日市市教育委員会

文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果から、国語に課題を抱えていた三重県四日市市。2020年度に策定した「新教育プログラム」では、1つめに「読む・話す・伝えるプログラム」を掲げ、言語能力の育成に力を入れている。言語能力を体系的に育めるよう「読解力を育む『20の観点』」を設定し、各観点に対応した問題のワークシートも作成。外部検定で成果を可視化するとともに、教科学力と言語能力との関係を示し、言語能力育成の重要性を学校現場に伝えている。

自治体概要

2020年度からスタートした市の総合計画において、4つの将来都市像の1つめに「子育て・教育安心都市」を掲げ、子育て・教育施策を展開。学校教育では、「夢と志を持ち、自らの未来をつくるよっかいちの子ども」の育成を目指し、「新教育プログラム」を推進。

人口 約30万7,000人 面積 206.52km²
市立学校数 小学校37校、中学校22校
児童生徒数 小学校約1万5,000人、中学校約7,400人
教員数 約1,400人

説明的文章の読解の観点を整理して体系化

四日市市教育委員会（以下、市教委）は、2020年9月、就学前から小学校、中学校の期間において、目指すべき子どもの姿とその実現に向けた取り組みを6つの柱に整理した「新教育プログラム」（図1）を策定した。各園・各学校段階の取り組みを有機的に結びつけ、その系統性を保育者や教員の間で共有することで、就学前から中学校までの学びの一体化を図り、小学校では2020年度、中学校で

図1 「新教育プログラム」6つの柱

柱1	読む・話す・伝えるプログラム
柱2	論理的な思考で道筋くつきりプログラム
柱3	英語でコミュニケーション IN 四日市!プログラム
柱4	運動大好き! 走・跳・投 UP プログラム
柱5	夢と志! よっかいち輝く自分づくりプログラム
柱6	四日市ならではの地域資源活用プログラム

※四日市市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

は2021年度に全面実施された新学習指導要領を各学校が着実に具現化できるようにすることがねらいだった。

新教育プログラムの柱の1つめには、学校教育活動全体で言語能力の育成を図る「読む・話す・伝えるプログラム」を掲げた。廣瀬琢也教育長はその背景を次のように語る。

『「全国学力・学習状況調査」における本市の状況は、算数・数学は毎年比較的良好な成績でしたが、国語は平均正答率が小・中学校とも全国平均を下回る年が度々ありました。そこで、学習の基盤となる言語能力の育成を1つめの柱に据えました」

各学校が言語能力の育成を推進できるようにするために具体化したのが、「読解力を育む『20の観点』」（以下、20の観点。P.11図2）だ。ここでは、「題名や見出しとその役割を理解する」「論の進め方等、筆者の意図を考える」など、説明的文章の読解に必要な20の観点を設定して明文化し、重点的に育成する学年を示した。指導課の重内庸司副参事は、20の観点の特徴を次のように説明する。

「教科書や生活の中でよく目にする



教育長
廣瀬琢也

ひろせ・たくや
三重県公立中学校校長、四日市市委員会指導課長、教育監等を経て、2021年8月から現職。



指導課 参事兼課長
草川 誠

くさがわ・まこと
三重県公立小学校校長等を経て、2023年度から現職。



指導課指導第1係
副参事兼課長補佐兼係長
重内庸司

しげうち・ようじ
三重県公立小学校教員等を経て、2024年度から現職。



指導課指導第1係 課付主幹
青木直絵

あおき・なおえ
三重県公立小学校教員を経て、2024年度から現職。

解説書などはほとんどが説明的文章ですから、その読解に必要な観点到特化しました。また、観点を示すことで、国語以外の教科でも言語能力の育成を意識した授業づくりがしやすくな

り、教科横断に言語能力を育むことができると考えました」

2021年度からは毎年、小・中学校各1校を実践推進校に指定。20の観点を各教科の授業でどのように活用しているかを「授業づくりヒント＆ポイント」にまとめて各学校に配布し、共有している。

2021年度には、20の観点に対応した問題のワークシートも作成した。A4判1枚につき5～10分間で取り組める問題量を、小学校中学年用は14枚、高学年用は20枚、中学校用は36枚を用意。解答とセットにして冊子にまとめ、児童生徒に配布した。

小学校用は、国語の授業の最後や帯学習での活用を想定して作成。20の観点の定着度を測れるよう、問題は教科書の素材文ではなく、児童が初見と思われるものを用いた。中学校用は、実践推進校と協働で9教科すべてのワークシートを作成。指導課の青木直絵課付主幹はその意義を次のように説明する。

「例えば、保健体育科では泳ぎ方のアドバイスを要約する、家庭科ではグラフを読み取って健康によい食習慣を考えるとといった問題を作成しました。生徒の学習用としてだけでなく、国語科以外の教員にとっても言語能力の育成、言語活動の充実を意識できたと思います」

学力と言語能力の相関関係をアセスメントで示す

2021年度からは、指導改善に役立てるため、全市立中学校の3年生を対象に「^{リテラス}Literas論理言語力検定」(以下、Literas)*を年1回実施している。

2023年度は、データが蓄積されてきたことから詳細な分析を行った。まず、Literasの正解数と「全国学力・学習状況調査」の国語・数学・英語の正

図2 小学校用「読解力を育む『20の観点』(抜粋)

		低学年		中学年		高学年	
		1年	2年	3年	4年	5年	6年
1	主語と述語の関係を理解する	◎	◎	○	○	○	○
2	共通・相違の関係を理解する	◎	◎	○	○	○	○
3	題名や見出しとその役割を理解する	○	◎	○	○	○	○
4	文章と資料(写真やイラスト等)を合わせて読める	◎	○	○	○	○	○
17	文章全体の構成を捉え、要旨を把握する(事実と感想、意見などとの関係)				○	◎	◎
18	文章と資料(図表やグラフ等)の関係や効果を理解する			○	○	◎	◎
19	論の進め方等、筆者の意図を考える			○	○	◎	◎
20	文章の種類や特徴を理解する(紹介、提案、推薦、案内、解説等)				○	◎	◎

◎がついている学年は、その観点を重点的に育成する学年。その他の学年でも、実態に合わせて系統的・継続的に指導する。上記の表のほかにも図もある。また、中学校用もある。

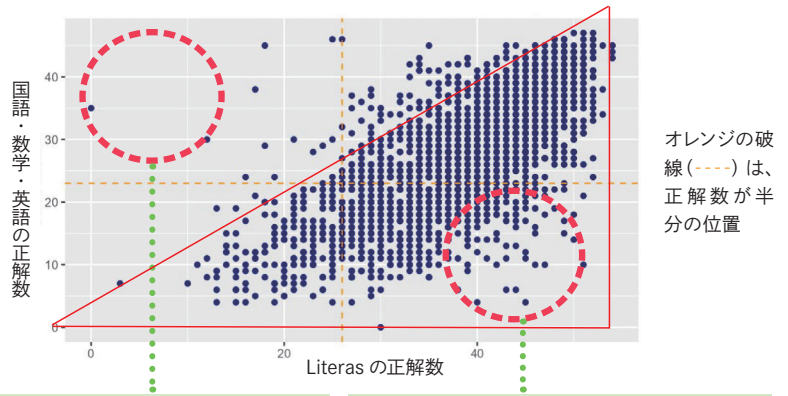
※四日市市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

図3 Literasの正解数と「全国学力・学習状況調査」の国語、数学、英語の正解数との相関

		全国学力・学習状況調査 正解数			
		国語	数学	英語	
Literas 正解数	Literas 全体	0.64	0.63	0.58	0.7以上：強い相関 0.4以上：中程度の相関 0.2以上 0.4未満：軽度の相関 0以下：負の相関
	語彙運用力	0.54	0.52	0.47	
	情報理解力	0.59	0.60	0.56	
	社会理解力	0.54	0.54	0.49	

※四日市市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

図4 Literasの正解数と「全国学力・学習状況調査」の国語・数学・英語の正解数の散布図



Literasの正解数は少なく、
国語・数学・英語の正解数は多い
→ほとんどいない

Literasの正解数は多く、
国語・数学・英語の正解数は少ない
→一定数存在する

※四日市市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

解数を分析すると、両者にはやや強い相関があり、言語能力と国語・数学・英語の教科学力が密接に関連していることが分かった(図3)。さらに、Literasの正解数と「全国学力・学習状況調査」の国語・数学・英語の正解数

を散布図にしたところ、「Literasの正解数は少なく、国語・数学・英語の正解数は多い」生徒はほとんどいなかったが、「Literasの正解数は多く、国語・数学・英語の正答数は少ない」生徒は一定数存在(図4)。つまり、

* ベネッセコーポレーションが提供する検定の1つ。社会で活躍するために必要な力を「語彙運用力」「情報理解力」「社会理解力」の3つの領域で育成・測定する。

Literasで測定しているコアの言語能力は、教科学力を下支えしている力であることが分かった。指導課の草川誠参事は次のように説明する。

「言語能力と教科学力には相関があると推測していましたが、今回の分析でそれが証明されました。先生方には、言語能力を育成することは教科学力の向上につながるため、より自信を持って取り組みを推進していきましょうと伝えています」

子どもの成長の土台となる非認知能力の育成も重点化

新教育プログラムの実施以降、「全

国学力・学習状況調査」の国語の平均正答率は、全国平均を超えることが多くなってきた。今後は実践推進校の取り組みを市内全校に広めるとともに、同プログラムの2つめの柱「論理的な思考で道筋くっきりプログラム」との両輪で言語能力・論理的思考力の育成に力を入れていく考えだ。

「算数・数学は『全国学力・学習状況調査』で小・中学校とも比較的良好な成績を上げており、算数・数学で育まれる論理的思考力は本市の強みです。言語と思考は不可分な関係にあるため、問題解決的な学習の中で、考えるための技法（思考スキル）を意識した授業づくりを推進し、

論理的思考力と、言語能力との相乗効果を図っていきたいと考えています」（草川参事）

また、子どもの成長の土台となる意欲や向上心などの「自分を高める力」、やり抜く力や自制心などの「自分と向き合う力」、協調性やコミュニケーション能力などの「他者とつながる力」など、非認知能力の育成にもこれまで以上に力を入れていく。

「就学前から中学校まで一体的に質の高い教育を提供することで、子育て世代の定住を促し東海地区の西の中核都市としての存在感を示すとともに、持続可能な都市づくりを支えていきたいと思っています」（廣瀬教育長）

実践事例

問題解決的な学習の中で、『考えるための技法（思考スキル）』を意識した授業づくりを推進

実践推進校 四日市市立港中学校

各教科における読解力を定義

2021年度、市教委から読解力育成の実践推進校の指定を受けた四日市市立港中学校は、「全教科で読解力を育む」という共通認識の下、取り組みを進めている。研修担当の久門あゆみ先生は、次のように説明する。

「読解力は、どの教科においても生徒が学習内容を理解するために必要な資質・能力です。社会に出てからも仕事や生活の様々な場面で求められることから、国語科以外でも読解力を意識した授業づくりをすることが重要だと、

教員間で意識を共有しました」

まず教員間で話し合い、9教科それぞれにおける読解力とは何かを20の観点を踏まえて定義し、各教科はそれを踏まえた授業づくりを行っている。また、9教科すべてで20の観点のいずれかに対応したワークシートを作成。それらは、市教委が各学校に配布するワークシートの冊子に収録された。

ほかにも、生徒が自分の関心があることを伝え合う「みなトーク」を週1回実施したり、朝読書では月1回、教員が読み聞かせを行い、多分野の書籍



研修担当

久門あゆみ
ひさかど・あゆみ
英語科。

■学校概要

生徒数 180人 学級数 8学級
教員数 29人

に触れられるようにしたりするなど、活動に工夫を凝らしている（図5）。

それらの成果は「全国学力・学習状況調査」やLiterasの結果に表れている。

「生徒には、難しい文章でも粘り強く読む姿や、グループ活動で自分の考えを分かりやすく伝えようとする姿が見られています」（久門先生）

図5 読解力の育成を目指した活動（例）

- 全教科で、「読解力を育む『20の観点』」を意識した授業づくり（全学年）
- 自分が関心を持っていることなどを話すソーシャルスキルトレーニング「みなトーク」を週1回実施（全学年）
- 「みなとタイム」（帰りの会前の10分間の帯学習）で、「Literas」のワークブックに取り組む活動を週1～2回実施（2年生）
- 帰りの会で、1日を振り返って「今日、私が思うこと」を自由に書き、翌日の学級通信でその一部を共有（2年生）

※港中学校への取材を基に編集部で作成。

Web VIEWnext ONLINE

取り組みの詳細をウェブサイトで紹介しています。右記の2次元コードからアクセスしてください。

